

まえがき

2017年7月11日に岩崎英二郎先生が95歳の生涯を閉じられてから、6年以上が経過した。ご逝去の1年後の2018年には岩崎先生に長らくご指導いただいた慶應義塾大学文学部独文学専攻の教員（特に先生に直接ご指導いただいた者たち）の間で計画は持ち上がってはいたものの、編集スタッフの個人的な事情や健康状態、また2020年からの新型コロナウイルス蔓延などの諸事情により作業は遅々として進まず、とうとうこのような時期の発行になってしまった。早々にいただいた論文の内容には、現在では書き換えが必要になった部分もあるだろうし、何よりこの間にご逝去された執筆者の方もおられる。衷心よりお詫び申し上げたい。また、辛抱強く作業にお付き合いくださり、お待ちいただいた皆様にも、心よりの感謝を申し上げる次第である。とりわけ、全面的に出版のための資金をご提供くださり、それにもかかわらず進まない作業を見守り続けてくださった岩崎先生御次男岩崎純氏にも篤く御礼申し上げたい。

慶應義塾の独文学専攻自体、ここ数年は過渡期であり次々と定年退職者が相次いだ。そんな中、和泉雅人先生と斎藤太郎先生は、特に企画や編集作業の初期において多くの仕事をしてくださった。お二人の退職後、ますます作業のペースが落ちてしまったのは、その後刊行委員会の代表となった私糸川の粗忽さと力量の無さと申し上げざるを得ず、この点でも幾重にも面目なく感じる次第である。岩崎先生がこの状況をご覧になられたら、「またかね」と苦笑されるのではないだろうか。

思えば岩崎先生は並外れて出来の悪い学生だった私を、嫌な顔ひとつせず指導してくださった。大学受験で2年浪人、入学後も1年生を2回、2年生も2回やって、他人より4年も遅れをとっていた私は勉強もできなかった。岩崎先生がドイツ語学の基礎概念を教えてくださいました授業でも、Attribut や freie Angabe といった基礎概念がなかなか飲み込めない。岩崎先生から「では、糸川さん、あなたのお考えはどうですか？」と指名されても、「すみません。家で考えても、分かりませんでした」などと答えるのが席の山であった。先生は「そっ」とだけ仰ると、話を先に進めてくださった。

そんな私ゆえ、数年の雑誌編集プロダクション勤務を経て、大学院修士課程に再入学した時には、岩崎先生は私のことなどは覚えておられないだろうと思った。「い、岩崎先生、私は以前学部におりました糸川と申しまして、このたび……」、すると先生は、「呆れた」という表情をされて、「何言ってるんですか！ 知ってますよ、そんなことは！」と仰り、そのままスタスタとあの長い

足で歩いて行った。その時も、少し苦笑いしておられたように思う。

大学院に入って、少しは真面目に勉強するようになると、いよいよ岩崎先生の偉大さが身に沁みた。学部生時代は「岩崎先生は denn や auch の研究をしておられる」と聞いても、「ふうん」くらいしか思うことができなかった。しかし、18世紀の難しいドイツ語を様々な辞書を引きながら脂汗とともに読むことを始めると、岩崎先生の不変化詞、心態詞の研究が、『不変化詞辞典』や『副詞辞典』がいかに労作で、私たちのドイツ語読解を助けてくれるものか分かるようになった。また、学会の雑用係などをやり始めると、長年日本独文学会のリーダーとして、IVG 会長として、先生がどれほどの責任と信頼を背負って仕事をなさっていたかも、ひしひしと感じられるようになった。

その後も、岩崎先生の偉大さは、今日に至るまで私の心の中でも膨らみ続けている。ただ、そんな崇敬の念があまりに強すぎて、私は先生について遠慮をしてしまったのかもしれない。お食事に招いていただいても、お手紙や電話を頂戴しても、いつも緊張して、「無駄口」をきくことがあまりできなかった。

私が「しまった」と思ったのは、奥様の篁子さんがお亡くなりになって2、3日経ったときだった。私は、自分ごときがお宅に伺ったり、お電話をかけたりの数は数日後が適切だろう、と思い込んでしまっていた。すると、私の携帯電話の留守番録音に、岩崎先生メッセージが入っていた。“老齢にして長らく連れ添った妻を失った友人が身を振らんばかりに悲嘆に暮れているのに、君はなぜ何もいって来てくれないのか”という非難の言葉だった。

その後、私は岩崎先生から頂いたお手紙や電子メールを急ぎ見返した。そして、嘆息した。それは教師が教え子に対して語るのではない、年配の男性が、年下の親しい友人に向けて発する言葉ばかりが並んでいることに、今更ながら気付いたのである。私は、「尊敬する」ことばかりに気持ちがいてしまい、人間としてもっとも大切にすべき心情はむしろ「友愛」であることを忘れていたのかもしれない。

それゆえ、この本こそは、岩崎英二郎先生の「若い友人たち」からのプレゼントとして、お届けしたい。各方面に多大なご負担とご迷惑をおかけすることになってしまった編集作業ではあったが、ご執筆くださった皆さま、関係してくださった皆様のお陰で、いかに先生が敬愛された方であったかを示す本を作らせていただけたとは申し上げられると思う。

2023年12月

刊行委員会代表
桑川 麻里生